

Bird Research Annual Report 2022

バードリサーチ活動報告



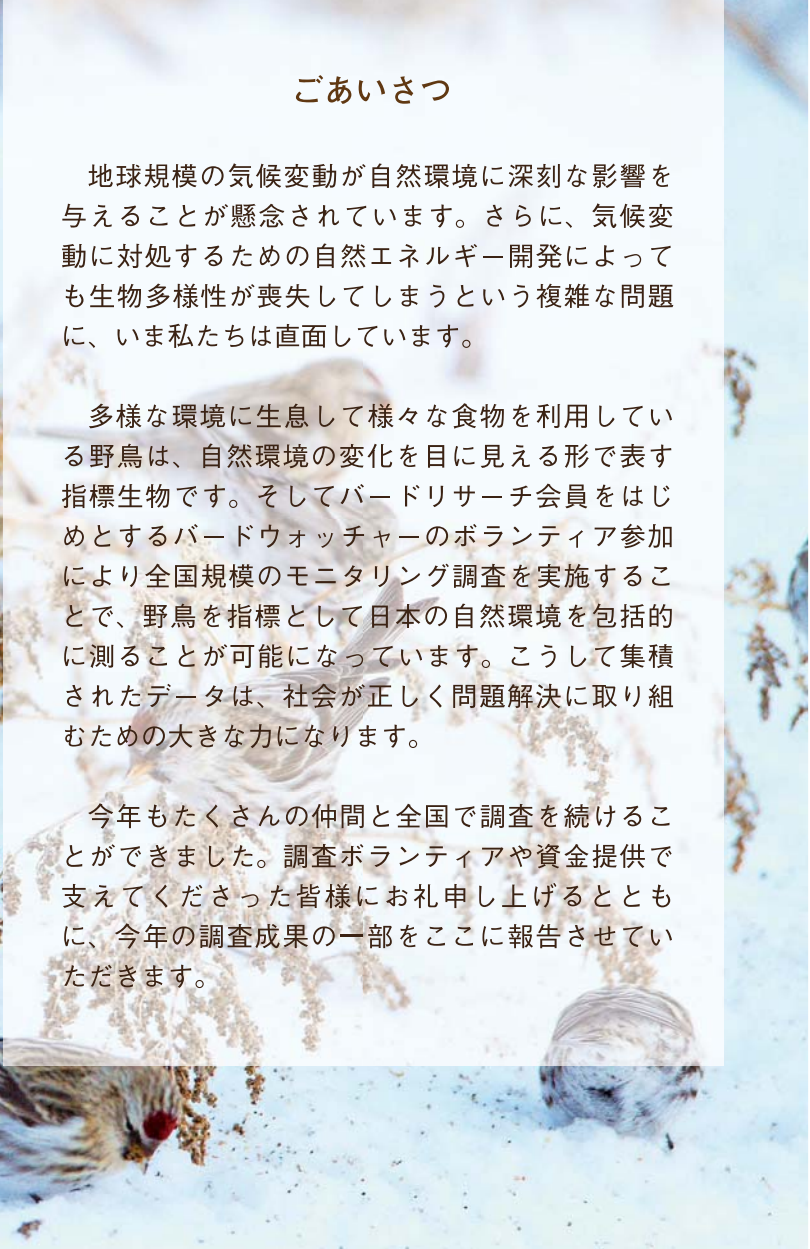
NPO法人 バードリサーチ
Japan Bird Research Association

ごあいさつ

地球規模の気候変動が自然環境に深刻な影響を与えることが懸念されています。さらに、気候変動に対処するための自然エネルギー開発によっても生物多様性が喪失してしまうという複雑な問題に、いま私たちは直面しています。

多様な環境に生息して様々な食物を利用している野鳥は、自然環境の変化を目に見える形で表す指標生物です。そしてバードリサーチ会員をはじめとするバードウォッチャーのボランティア参加により全国規模のモニタリング調査を実施することで、野鳥を指標として日本の自然環境を包括的に測ることが可能になっています。こうして集積されたデータは、社会が正しく問題解決に取り組むための大きな力になります。

今年もたくさんの仲間と全国で調査を続けることができました。調査ボランティアや資金提供で支えてくださった皆様にお礼申し上げますとともに、今年の調査成果の一部をここに報告させていただきます。



ベニヒワ (Photo: 藤井 薫)

STAFF

左から 植田睦之、守屋年史、神山和夫、高木憲太郎、植村慎吾
国立駅の旧駅舎前にて



黒沢 令子



平野 敏明



三上 かつら



ミソサザイ (Photo: 中村健三)

この1年の活動をコンパクトにまとめてお伝えします。

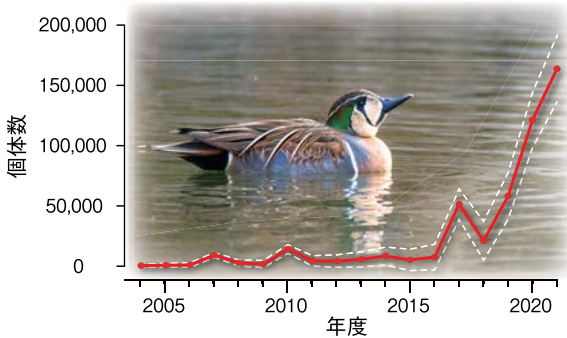
NEWS & TOPICS

トモエガモの越冬数が急増しています

【BRNews 2022年11月:1】

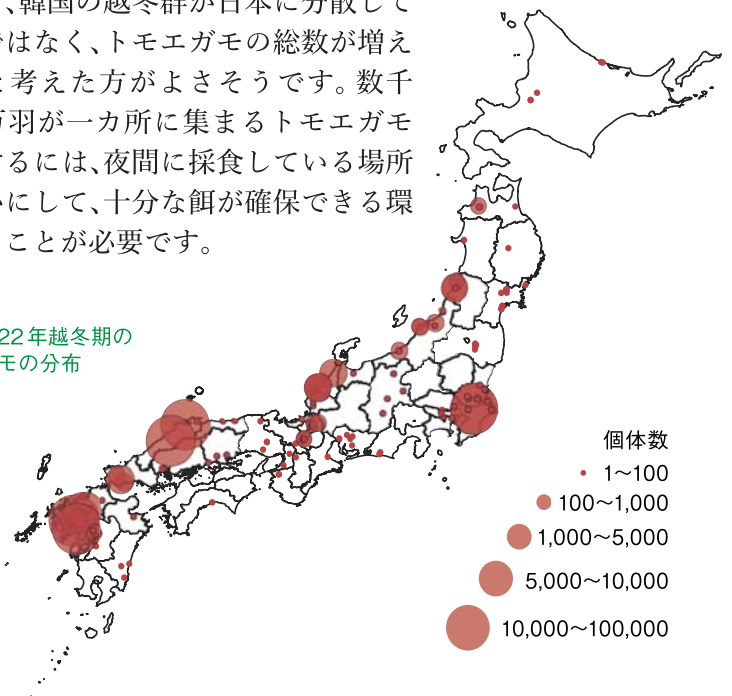
トモエガモは極東ロシアで繁殖して東アジアだけで越冬している種で、日本では数が減ったため環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。それが2017/18年ごろから国内の越冬数が急増し、2021/22年の越冬期は主要な飛来地の最大数合計が15万羽を超えたようです。飛来数の多い湖沼は九州北部から山形県までの日本海側と関東地方にあります。

トモエガモの主要越冬地は韓国ですが、近年の個体数は30~40万羽で安定していることから、韓国の越冬群が日本に分散してきたのではなく、トモエガモの総数が増えていると考えた方がよさそうです。数千から数万羽が一か所に集まるトモエガモを保全するには、夜間に採食している場所を明らかにして、十分な餌が確保できる環境を守ることが必要です。



▲主要飛来地の個体数から推定したトモエガモの個体数変化
Photo: 白石雅昭

▶2021/22年越冬期のトモエガモの分布



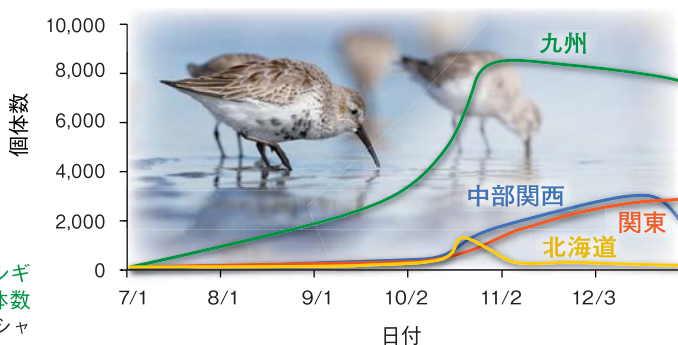
ハマシギの保全を湿地環境の保全につなげる

バードリサーチでは、東アジア-オーストラリア地域の国際間を移動する渡り性水鳥の保全や啓発活動について、環境省や他の環境NGOと協力して取り組んでいます。

北極圏で繁殖する渡り鳥の保護プロジェクトに"北極渡り鳥イニシアチブ (AMBI)"という国際協力の枠組みがあり、ハマシギが優先種に位置付けられています。ハマシギは日本国内では最も数多く観察されるシギで、干潟や河口、湖沼などで越冬する湿地環境の指標種です。

国内モニタリング調査のデータ分析から、10月頃から個体数が増える他の地域と異なり、九州地域のハマシギは7月頃から個体数が増え、8月の初頭には1,000羽ほどの群れがすでに渡来している場所があることがわかりました。これまで、日本で越冬するハマシギは、アラスカで繁殖していることが分かっていたのですが、この九州地域の早い渡りの群れは、渡りルートの異なる別の繁殖地から来た可能性が考えられます。

長距離を移動する渡り性水鳥の繁殖地、中継地、越冬地は、それぞれが大きく離れ国をまたぎます。これからも各機関と協力して、日本に渡来する個体の生息地の解明を行い、それぞれの地域でのハマシギの保全を進めることが、日本や東アジアの湿地環境の保全に貢献すると考えています。



▶地域別のハマシギ渡来期の個体数
Photo: 染谷カーシャ

繁殖分布調査の結果で ゴイサギとバンが狩猟鳥獣から解除に

【BRNews 2022年9月:2】

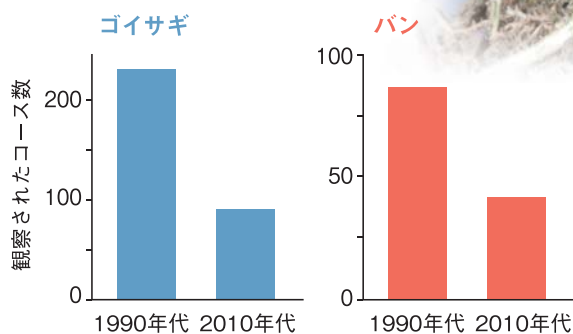
2,000人以上のボランティア調査員により2016年から2021年まで行なわれた「全国鳥類繁殖分布調査」では、現在の日本の繁殖鳥の分布が明らかになり、また、過去の情報と比較することで、減った鳥、増えた鳥などが明らかになりました。減少が著しいことがわかったのが、小型のサギ類、農地など開けた場所にすむ鳥、飛翔採食性の鳥などですが、その中には狩猟鳥獣であるバンとゴイサギも含まれていました。ちょうど狩猟鳥獣の見直しが行なわれていたので、この情報を提供し、狩猟鳥獣からの解除について提案したところ、専門家による審議やパブリックコメントを経て、2022年9月15日にこの2種が狩猟鳥獣から解除されることになりました。

全国鳥類繁殖分布調査の成果は、現在改訂が進められているレッドリストへも情

報提供しています。

調査結果がさまざまな自然保護施策に使われていくよう、今後も情報提供、結果の解析を進めていきたいと思っています。

▼1990年代と2010年代の繁殖分布調査で、ゴイサギとバンが観察された調査コース数。どちらも半分以下に減少していた。



バン (Photo: 山田琉太郎)

シカの影響で減少した藪の鳥が回復傾向に？

【モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査情報 13(2)】

バードリサーチと日本野鳥の会で事務局を務めている環境省モニタリングサイト1000の森の鳥のモニタリングでは、ウグイスやコルリ、ソウシチョウなど藪に生息する鳥たちが減っていることが明らかにされてきました。こうした場所ではシカが増加していて、シカがスズタケなどの

下層植生を食べてしまうことで、生息環境が減少していることがその原因であると考えられていますが、この影響が緩和・回復する兆しが見えてきました。一時ほとんどいなくなってしまったこれらの鳥たちがここ数年、いくつかの調査地で再び見られるようになってきているのです。

これらの調査地でシカがいなくなったわけではなく、また、植生が回復したわけでもないのですが、シカが好まないアセビなどの植物が増えて来るなど若干の変化が見られています。今後、さらに回復していくのか、どのような環境条件の調査地で回復が進むのか、どのような鳥種が回復しやすいのかなど、モニタリングを続け、明らかにしていきたいと思っています。



ウグイス (Photo: 中村健三)



コルリ (Photo: 渡辺修自)

高山帯鳥類調査 イワヒバリを探せ!!

【BRNews 2022年7月:3】

イワヒバリは、高山帯の岩場や雪渓で虫などを食べ、岩の隙間などに営巣して繁殖する鳥です。山頂まで樹木に覆われた山には生息していません。また、群れで繁殖し、広い行動圏を持っている様子からは、生息に適した環境の面積も重要だと思われ、生息できる山は限られます。しかし、どの山に生息しているのかといった分布情報も、十分には得られていません。そこで、今年度からイワヒバリの目撃情報の収集を開始しました。

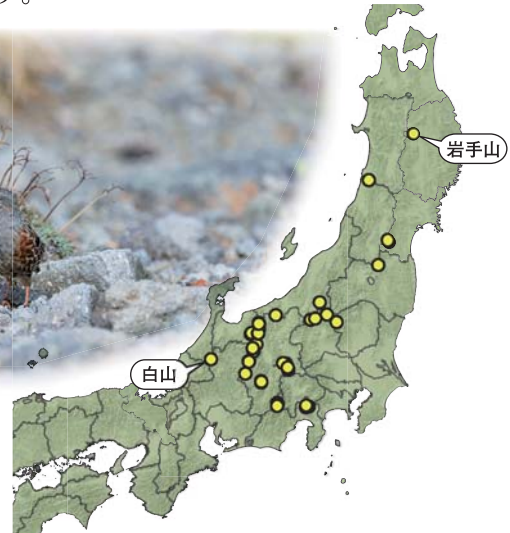
8月から10月までの3か月で71件の情報が寄せられました(右図)。今のところ、最北の目撃情報は岩手山、一番西は白山です。引き続き目撃情報を集めると共に、登

山記録サイトに投稿された写真から位置情報を集めて、イワヒバリの分布状況を明らかにしていきます。



Photo: 山賀徹志

▶2022年8~10月に寄せられたイワヒバリの目撃地点



食性データベース始動

ある鳥が何を食べるかという情報は、分布の情報と並んで基礎的な情報です。しかし、鳥がどの時期に何を食べるかについては意外と情報が不足しています。

食性データベースは、バードウォッチャーの皆さんと双眼鏡やカメラを使った観察で鳥の採餌情報を集め、1例ずつデータベースに蓄積していこうという企

画です。2022年の1月に始めたデータベースにはこれまでに約900件以上の記録が寄せられました。記録が多くなって、蓄積された記録から色々な切り口で情報を抽出して食性について調べてみる、ということを目指しています。

イカルチドリがヒルを食べたという記録や、ヒヨドリがトキワサンザシの実を18粒連続で食べたなどおもしろい記録も寄せられました。また、今年は特にジョウビタキやイソヒヨドリなどで越冬期の食性情報の収集を呼びかけ、有志のグループで情報共有をしました。ジョウビタキの食性情報は冬の間 nationwide から42件が寄せられました。まだまだ数は少ないものの、緯度や雌雄による食性の違いがあるかないかを予備的に解析してみました。今回の記録では場所や雌雄による食性の違いはよくわかりませんが、観察が難しいという実感や食性の他にも新しく調べたいテーマがいくつも提案されるなど活発な議論がありました。



ジョウビタキ (Photo: 植本義一)

国内希少野生動植物種から解除された オオタカのその後

【 Bird Research 18 : A99-A101 】

2017年9月21日、オオタカが国内希少野生動植物種から解除されました。解除によりオオタカが減少してしまわないかという懸念もあり、環境省の事業として解除後の変化を全国6地域で5年間調査しました。また、並行して事業終了後にも継続してモニタリングできるように、NGOベースの繁殖成功率のモニタリング体制の構築を進めました。

今回の調査結果をそれ以前の情報とあわせて集計すると、オオタカのつがいの数は2000年代以降減少傾向にあるものの、「希少種解除」により減少が大きくなってはいないことがわかりました。ただし、日本オオタカネットワークなどと共同で進

めている繁殖成績のモニタリングでは、繁殖成功率や巣立ちヒナ数に減少傾向が認められました。比較的長寿のオオタカでは、解除の影響がすぐには現れず、しばらくしてから現れる可能性もあります。環境省の事業は2022年3月をもって終了しましたが、バードリサーチでは他団体と協力して、今後もオオタカの状況を記録していきます。

▶全国6地域のオオタカのつがいの数の変化。実線は推測、点線は推定からのばらつき度合いを示す。

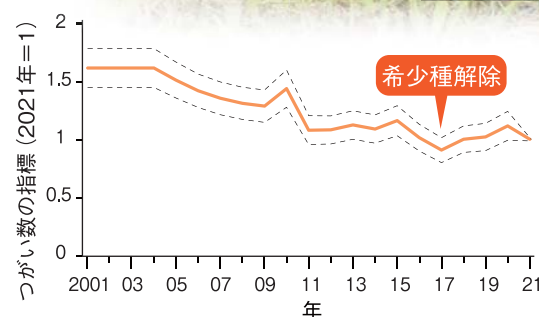


Photo : 渡辺美郎

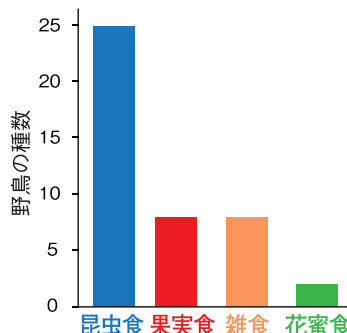
夏鳥が越冬するコーヒー農園で鳥類調査

レギュラーコーヒーに使うアラビカ種のコーヒーは伝統農法では高木の日陰で栽培されるので、コーヒー畑は日本の里山のような環境で野鳥の生息地にもなります。

フィリピンのルソン島の山岳地帯で、森林を焼いて作られた畑にふたたび植林をして営まれているコーヒー農園を野鳥の生息地に適した環境にするための調査を行いました。新型コロナウイルスの感染拡大のため渡航ができず、ICレコーダーを使った録音調査になりましたが、3~4月の繁殖期にコーヒー農園では4~20種、自然林では5~23種の野鳥が記録されました。いちばん多かったのは昆虫を餌にしている野鳥でした。昆虫食



▲植林地に植えられたコーヒーの苗木



の野鳥はコーヒーに特有な害虫の発生を低減することが分かっているので、野鳥の種数が少ない農園にも適切な樹木や藪を植えることで、農家はコーヒーで収入を得ながら野鳥の生息地を守ることができます。

今後は現地で農業支援をしているCordillera Green Networkに協力して植生管理をサポートしていきます。コーヒー農園やその周辺ではノゴマやアカモズといった夏鳥が越冬しているのも見つかっているので、持続可能なコーヒー農園は夏鳥の越冬地を守ることに役立つでしょう。

◀コーヒー農園と自然林で記録された食性別の野鳥の種数

天候が安定し暖かい冬は カワウがあまり減らない？

バードリサーチでは設立以来、カワウの調査や管理に関わってきています。その知見を活かして彼らの生息状況の分析や、検討会・研修会等の運営を、環境省や地方自治体から委託を受けて実施しています。カワウの生息状況の調査は主に都道府県によって実施されていますが、調査されていない年があるなどデータの抜けが多いのが難点でした。そのため、全国的なカワウの個体数の変化を把握することができていませんでしたが、今年はそうした抜けを強引に埋めて補正するということをしました。

カワウの個体数は厳冬期(1,2月)を挟ん

で春になると個体数が減少するため、食べものが少なく寒さが厳しい状況で死亡する個体が多いのではないかと想像していました。実際に補正されたデータからも、冬期の天候が安定し暖冬だった年はあまり減少せず、悪天候が続き寒さが厳しい年は大きく減少している傾向が見られました。銃器捕獲による個体数調整が進み、減少していた個体数が近年増加に転じています。今後の推移はカワウの管理にとって重要ですが、気候が影響しているかもしれないと考えて分析していくことで、各地の対策の立案に役立てていけたらと思います。



Photo: 野間修一

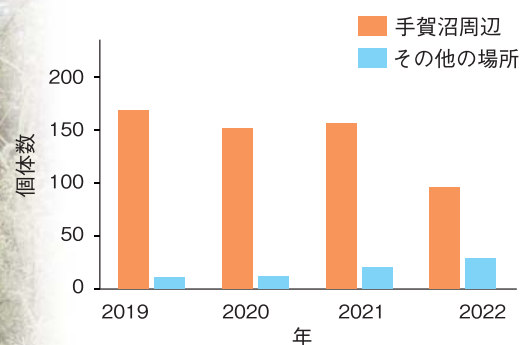
コブハクチョウの生息状況調査

コブハクチョウは、全国のいくつかの場所で野生化しています。中でも千葉県北部では数が増えていて、田植え直後の水田で稲を食べるなど人との軋轢が広がっています。

そんななか、2019年から千葉県の委託を受けてコブハクチョウの生息状況の調査などを行ってきました。2019年から2021年にかけては、手賀沼の周辺では個体数が高止まりしている一方、利根川の下流域では個体数が増え続けています。ところが2022年の調査では、手賀沼周辺では繁殖期

の個体数が減少したことがわかりました。

繁殖期の個体数減少の原因は明らかではありませんが、手賀沼周辺で個体数が飽和していたコブハクチョウが季節的な移動を始めた可能性があります。繁殖分布が広がってしまうと、個体数を減らしていくための対策もより負担が大きくなります。より効率の高い繁殖抑制を提案するほか、特に冬季の生存率を高めていると思われる給餌を減らしていくことについて、関係者とともに合意をつくっていく考えです。



▲千葉県北部のコブハクチョウの個体数推移



Photo: 松村千恵

みんなで進める 調査・研究

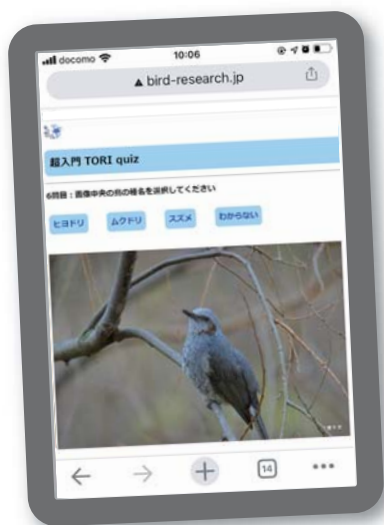
バードリサーチでは、野鳥の観察、調査、研究のための様々な支援を行っています。

『調査研究支援プロジェクト』では、調査研究プラン10件に対して、312名の方から総額203万円の寄付が集まり、得票数に応じて支援金を贈呈することができました。また、調査や研究の成果を発表する場として、『バードリサーチ鳥類学大会』をオンラインで企画し、約500名の参加者が情報交換を行うことができました。

とりまとめの支援として、野鳥の記録をまとめるデータベース『フィールドノート』の整備を進めています。定期的にフィールドノートを利用した『インターネット・バードソン』も企画していますので是非参加していただいて、感想をお寄せください。

そのほかに、『さえざり検索』や『TORIクイズ』など、鳴き声や画像による識別学習の支援やYou Tubeなどを利用した発信なども行い、今後も野鳥に関する調査・研究の支援を行います。

今年、バードリサーチでは367名から3,298,459円の寄付をいただきました。寄付は、研究支援、ツバメのフン受けの作成などに使用させていただいています。また、寄付だけではなく、企画した調査に4,125名の調査協力もいただいています。全国の方から寄せられた報告をまとめ、野鳥の生態や国内の自然環境を知る手がかりを発信していきたいと考えています。引き続きご支援をよろしくお願いいたします。



TORI quizは
こちらからどうぞ ↓



表紙写真：アトリ (Photo: 染谷カーシャ)

特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒186-0002 東京都国立市東 1-4-28 篠崎ビル 302

Tel/Fax : 042-505-4044

E-mail : br@bird-research.jp

http://www.bird-research.jp

デザイン：いきものパレット

